

## 第2章 子どもを取り巻く状況 ～子どもの権利に関する実態・意識調査から

第5期川崎市子どもの権利委員会では、市長からの諮問事項「子どもの成長に応じた育ちの支援について」を受けて、家庭・学校・地域における子ども、おとな、職員の生活実態と意識に関する調査を実施した。今期は、過去4回継続して行ってきた調査内容に加え、とりわけ「乳幼児の保護者（就学前の子どもの実態把握も合わせて）」「おとなになったばかりの若者世代（10代・20代）」の直面する課題を明らかにすることに留意した。

ここでは、平成26（2014）年3月に実施した「川崎市子どもの権利に関する実態・意識調査」の報告書から、答申内容につながる実態を抜粋して述べることとする。調査対象者は子ども（11-17歳、有効回答数714、回収率34.0%）おとな（18歳以上、有効回答数307、回収率34.1%）職員（市立施設等の職員、有効回答数275、回収率55.0%）である。

### 1 子どもの生活実態

#### (1) 子どもが疲れや不安を感じること

##### 【子どもの活動内容に関して】

##### ア 「学校の勉強・宿題」

子ども全体の半数以上の子どもが「学校の勉強・宿題」に疲れや不安を感じており、最も多い回答であった。小学生世代ではそれでも半数以下だったが（40.4%）、中学生世代（58.2%）高校生世代（58.0%）では過半数であった。それに加えて高校生世代では「受験・進路」という回答が56.8%と高かった。

##### イ 「クラブ活動・部活動」

中・高校生世代の子どもの30%が「クラブ活動・部活動」に疲れや不安を感じており、2番目に多い回答であった（中学生世代32.3%、高校生世代29.6%）。

##### 【人間関係について】

##### ア 「友達や先輩との関係」

中・高校生世代の子どもの30%が「友達や先輩との関係」に疲れや不安を感じている。（小学生世代17.1%、中学生世代30.7%、高校生世代28.4%）

##### イ 「いじめ・嫌がらせ・シカト」

小・中学生世代の子どもの15%が「いじめ・嫌がらせ・シカト」に疲れや不安を感じている。（小学生世代16.8%、中学生世代14.3%、高校生世代5.2%）

##### ウ 「親・保護者との関係」

高校生世代の子どもの15%が「親・保護者との関係」に疲れや不安を感じている。（小学生世代3.2%、中学生世代8.8%、高校生世代15.4%）

## エ 先生との関係

「先生との関係」に疲れや不安を感じているという子どもは、小学生世代で12.7%、中学生世代で14.3%、高校生世代で9.3%あった。

### (2) 自分の気持ちや悩みを話せるおとなの有無について

「困ったときの相談相手」として、子ども全体で最も多い回答は「親」でおよそ70%の回答であった。一方で「だれにも相談しない」という子どもが、小学生世代で5.5%、中学生世代で6.8%、高校生世代で8.0%いる。

「安心して自分の気持ちや悩みを話せるおとなが少なくとも1人いる」子どもは、「いない」子どもに比べて、疲れや不安を感じることで「学校の勉強・宿題」「いじめ・嫌がらせ・シカト」「親・保護者との関係」「友だちや先輩との関係」「受験・進路」をあげる割合が10ポイント以上低かった。逆に、「安心して自分の気持ちや悩みを話せるおとながいない」子どもは、「少なくとも1人いる」子どもよりも、疲れや不安を感じる割合が高い傾向にあった。

### (3) 大切だと思う権利

川崎市子どもの権利条例の条文にある7つの子どもの権利のなかで、自分にとって最も大切だと思うものとして最も多い回答は、「安心して生きられる権利」(69.6%)、次いで「ありのままの自分でいる権利」(48.3%)であった。

## 2 おとなの生活実態

### (1) おとなが疲れや不安を感じること

#### ア 「お金」「自分の身体のこと」「自分の将来」「家事」「介護」

多くあげられたこれらの回答は、前回に比べてどれも割合が増加していた。

#### イ 子どもへの虐待経験のあるおとなの特徴

子どもへの虐待経験のあるおとなは、虐待経験のないおとなに比べて、疲れや不安を感じる割合が高いことが多かった。中でも「たたいたりなぐったりする経験のあるおとな」は、経験のないおとなに比べ、「子どものしつけ」を、疲れや不安に感じることにあげる回答がおよそ25ポイント高かった(35.7%)。また、「ネグレクト経験のあるおとな」は、経験のないおとなに比べ、これに「子どもとのコミュニケーション」をあげる回答が23ポイント高かった(28.6%)。

子どもへの虐待経験のあるおとなのおよそ30%が、「子どものしつけ」や「子どもとのコミュニケーション」に疲れや不安を感じていた。

#### ウ 子ども時代に虐待を受けた経験のあるおとなの特徴

子ども時代に虐待を受けた経験のあるおとなは、経験のないおとなより、疲れや不安を感じる割合が高かった。これらの経験のあるおとなに特徴的だったのは、「自分の将来」や「自分の身体のこと」といった「自分に関すること」を、疲れや不安に感じることで多くあげているということで、中でもネグレクトされた経験のあるおとながこれらの項目をあげる割合が突出して高

かった。「自分の将来」をあげる割合：「ネグレクトされた経験あり」65.0%、「ない」35.4% 「自分の身体のこと」をあげる割合：「ネグレクトされた経験あり」75.0%、「ない」38.1%

#### エ 10代20代の若者世代の特徴

おとなになったばかりのこの世代が多くあげている回答は、「自分の将来」「就職」「お金のこと」「職場の人間関係」「自分の仕事」といった項目であった。従来の調査では「おとな」としてひとくくりにされてきたことで見えてこなかった若者世代の直面する課題が把握できた。

#### (2) 安心して自分の気持ちや悩みを話せる人の有無について

おとな全体では、話せる人がいる割合は85.3%、話せる人がいない割合は10.4%であったが、特に「子どもに対してネグレクト経験のあるおとな」は、経験のないおとなに比べ、話せる人がいない割合が10ポイント以上高かった（「経験あり」：21.4%「経験なし」：10.4%）。

話せる人がいないおとなは、いるおとなと比べて、疲れや不安を感じることで、24項目中12項目で10ポイント以上高い回答となった。とりわけ「お金のこと」（65.6%）「自分の身体のこと」（62.5%）「自分の将来」（59.4%）については60%前後があげていた。

### 3 職員の職場環境

#### (1) 自分の思いや考えを自由に言えるか

学校関係で77.8%、施設関係で86.5%が「言える」「だいたい言える」と回答していた。一方で、「あまり言えない」「言えない」という回答は、学校関係で22.2%、施設関係で12.4%あった。

#### (2) 安心して自分の気持ちや悩みを話せる人の有無について

「困ったり悩んだりしたときの相談相手」として最も多い回答は、学校関係・施設関係ともに約70%が「職場」の人間関係で、「友だち」「配偶者やパートナー」「自分の親、義理の親」がそれにつづき、「誰にも相談しない」割合は1%であった。しかし、自分の気持ちや悩みを話せる人が少なくとも1人いるかという設問に対して「1人もいない」という回答が、学校関係で11.1%、施設関係で9.3%あった。

### 4 まとめ

#### 【子ども】

日常生活のなかで、学校の勉強や部活動、友だちや先輩との関係に疲れや不安を感じる子どもが多く、学校の勉強・宿題については相当数に及んでおり、本来、自分の得意なことのできるクラブ活動・部活動についても30%程度の子どもの疲れや不安を感じている。また、小・中学生世代のおよそ15%は何らかのいじめ経験があり、それが疲れや不安の一因となっている実態が明らかになった。そのような状況に置かれている子どもの思いを受け止める身近なおとなの存在として、親・保護者や先生が挙げられる

が、逆に親・保護者や先生が、疲れや不安感の原因となっている子どもがいることも明らかとなった。

このような子どもの疲れや不安を受け止め、自分の気持ちや悩みを話せるおとなが少なくとも1人いる子どもは、いない子どもの回答よりも、疲れや不安に感じる割合が低い項目が多かったことから、そのようなおとなが少なくとも1人いるかどうか、子どもの疲れや不安感に大きく影響していることがわかった。

以上から、そのような子どもを支える身近なおとなの存在を、このような子どもたちに一刻も早く確保する必要があることが改めて見えてきた。安心して日常生活を送ることができ、ありのままの自分でいられるように、心の居場所となるおとなとの関係性をすべての子どもが確保できるように、子どもをとりまく身近な生活環境を一刻も早く整え、子どもの思いを受け止めていく必要がある。

### 【おとな】

一方で、子どもの思いを受け止めることを求められているおとなが、昨今は金銭面、介護・家事の多忙さ、体調不安や将来への不安を抱えて余裕のない実態が浮かび上がった。とりわけ子どもへの虐待経験のあるおとなや、子ども時代に自分が虐待にあった経験のあるおとなは、それらの経験のないおとなに比べて、育児や子どもとの関係構築に悩んだり、そもそも自分自身のことに悩んだり不安を感じたりしている実態が明らかになった。なかでも「子どもに対するネグレクト経験がある」おとなや「自分が子ども時代にネグレクト経験がある」おとなの置かれている状況は、経験のないおとなと比べて前述の悩みや不安を抱えている人が多く、それにもかかわらず誰にも相談できずに孤立している。自分から相談することができない状況にあることを踏まえ、このようなおとなも「安心して自分の気持ちや悩みを話せる人」を少なくとも1人確保できるような仕組みや体制づくりが必要である。

### 【職員】

このような子どもやおとなに直面することの多い職員は、おとなに比べて、子どもや子どもの周囲のおとなの課題に気づきやすい立場にある。実際、子どものいじめに気づく割合は、おとなが9.8%であるのに対し、職員は28.0%であった。いじめや家庭内における虐待など子どもに関わるさまざまな課題の解決のために、職員が大きな役割を担っていることはここで改めて言うまでもない。しかしその一方で自分の悩みを話せる人が1人もいない職員が10%いる実態もあることから、業務上子どもや子どもの周囲のおとなに関わることの多い職員に対する支援もまた必要であろう。

川崎市の子どもの権利保障の実現のためには、子どもと子どもを取り巻くおとな・職員の实態をトータルに把握し、子どもに対する直接的な支援のみならず、子どもを支えるおとな・職員の支援も同時に考えていく視点が重要である。子どもも、子どもを取り巻くおとな・職員も、悩んだり不安に感じたりした時に、1人で抱え込んで孤立することがないように、誰か1人でもそれに気づいて気持ちを受け止められるようにする体制づくりが、すべての場で必要である。すべての子どもに、条例で規定するすべての権利が保障される「子どもにやさしいまち」づくりを進めるために、子どもに対する支援のみならず、子どもからおとなへ移行していく若者世代や子どもを支援するおとなの支援も合わせて考える総合的な視点で、具体的な対策を立てていくことが求められる。